

## 女性の権利擁護と識字化のパイオニア、この世を去る

バブル・ラフマン (バングラデシュ)

バングラデシュに女性のエンパワーメント推進の立役者となった女性がいます。この女性はバングラデシュのみならず、世界中の女性のパイオニアとして活躍しました。その女性こそヌルジャハーン・ベグム氏です。今の世代の人たちは、ベグム氏の偉大さを理解できていないかも知れません。1947年に雑誌『ベグム』を創刊して以来、この雑誌を通じて世の女性たちを目覚めさせようと取り組んできた人物です。このインド亜大陸で初の女性のための週刊誌で編集者を務めたヌルジャハーン・ベグム氏が、2016年5月23日に91歳で逝去しました。



ヌルジャハーン・ベグム氏 写真：提供

英国BBC放送は、ベグム氏をバングラデシュにおける女性ジャーナリストの第一人者であり、南アジアの女性ジャーナリストの草分け的存在であったと報じました。

ダッカ大学の名誉教授で、著名な知識人であるシラジュル・イスラーム・チョウドリ氏も、60年来の『ベグム』誌の熱心な読者です。チョウドリ氏によると、1947年当時に女性読者向けの雑誌を出版することは、勇気ある一歩であったということです。その当時、女性の声を代弁するようなものはほとんど存在しませんでした。「女性が自分の写真を撮ることさえしなかった時代です。そのような社会において、『ベグム』誌は女性のあり方に大きな変化をもたらしたのです。」とチョウドリ氏は述べています。ベグム氏は、同誌において毎号にわたり執拗なまでに女性の権利を追求し、また女性の成功について重点的に取り上げてきました。その功績は色褪せることはないでしょう。

ヌルジャハーン・ベグム氏は、インド亜大陸初の女性向け雑誌である『ベグム』誌の編集者として、これまで65年もの長きにわたり活躍してきました。その人生を『ベグム』誌に捧げ、91歳で逝去するまで編集を務めたのです。同誌はバングラデシュ初の写真付き週刊誌で、多くのムスリムの女性ライターに著述の機会を与えてきました。

1947年の創刊から今日まで半世紀以上にわたり、『ベグム』誌は女性たちの理念を推進し、女性のための文学活動の場を提供する上で、重要な役割を果たしてきました。創刊号が出版された日は、ベグム氏とその仲間たちが革命を起こし、国内の女性解放運動の促進のために支援を始めた日でもあるのです。

ベグム氏の長女であるフローラ・ナスリン・カーンさんは、次のように述べています。「母は今まで『ベグム』誌を通じて女性の権利擁護を主導してきましたが、この雑誌が決して廃刊にならないことを願っていました。」「その願いをかなえるために、自分がどうにかして刊行を継続しようと思います。母の入院中、彼女にとって最後となる号を手渡してあげたいと思いました。もしそれができていたら、母はそれを手に取って微笑んだことでしょう。しかし、それには間に合いませんでした。」

1924年6月4日、東西分裂以前のベンガル（現在のバングラデシュとインドの西ベンガル州）のチャンドプール県チャリタトリ村で生まれたベグム氏は、西ベンガルのコルカタにあるベグム・ロケヤ氏が設立したシェカワット記念女子高校で学んだ後、ブラボン女子大学へと進みました。1947年、著名な文芸雑誌『ソーガット』の編集者として名高い彼女の父親のモハメド・ナシルディン氏が、メディアにおいて女性問題を取り上げる場を作ろうと『ベグム』誌を創刊しました。創刊当初はコルカタで発行されていた同誌は、1947年のインド・パキスタン分離独立の後、1950年に拠点をダッカに移しました。

『ベグム』誌の立ち上げから4か月後、詩人でもあったスフィア・カマル氏の後を引き継ぎ、ベグム氏が編集者に就任しました。創刊以来、同誌はインドの西ベンガル州とバングラデシュのベンガル社会において多くの女流文学の発展を後押ししてきました。ベグム氏は、同誌の編集者として、その女性の識字能力の向上と女流文学の振興に対する功績が認められ、1997年にロケヤ・ベグム賞を受賞しました。

ベグム氏は、最近のインタビューに次のように答えています。「私は『ベグム』誌以外の事は何もしようと思ったことはありません。私は自らの人生を女性解放と『ベグム』誌に捧げたのです。」1952年、ベグム氏は著名な文学者であるロカヌジャマン・カーン氏と結婚しました。ダダバイの愛称で親しまれたカーン氏もまた、バングラデシュの児童と青少年の福祉と育成に人生を捧げ、1999年にこの世を去りました。



『ベグム』誌の表紙

『ベグム』誌はムスリムの女性読者の間で人気を博しただけでなく、男性の注目も集めました。

ムスリムの女性たちにとって想像もできなかった時代に、『ベグム』誌は革命を起こしたのです。『ソーガット』誌の編集者として名を馳せ、『ベグム』誌を創刊したモハメド・ナシルディン氏を父に持つベグム氏は、あらゆる社会的・経済的地位の女性のためのプラットフォームを築きました。

バングラデシュを代表する作家の一人であるセリナ・フセイン氏も『ベグム』誌に寄稿していますが、次のように述べています。「この雑誌は、記事とともに写真も掲載しています。当時の女性にとって、自分の写真が出版物に載ることは一大事でした。ベグム氏はこの雑誌を通じ、女性たちがライターやジャーナリストを目指す意欲をかき立てました。さらに、女性のエンパワーメントに関して、この国の女性がこれまでに腕を磨いてきた裁縫、料理、育児などのスキルを活用し、いかに身を立っていくかについてのアイデアも提供しています。」

ジャーナリストのディル・モノワラ・モヌ氏は、ベグム氏による指導のもと1974年から25年間にわたり『ベグム』誌の仕事をしてきました。彼女は編集者のベグム氏について「伝説的人物だった」とした上で、次のように語っています。「雑誌の出版そのものに加え、ベグム氏の真の意図はその先にあります。つまり、農村部の女性たちに手を差し伸べ、意識の高揚を図り、発展とエンパワーメントに向けた道を切り開いていくことこそが、彼女の本当の目的だったのです。」

伝説の編集者ヌルジャハーン・ベグム氏に、心から哀悼の意を捧げます。